

# 「社会文化」という言葉について

米 山 俊 直

## On the Concept of “Socio-cultural”

YONEYAMA Toshinao

### 1. はじめに

大手前大学に社会文化学部が誕生したのが2000年。3年目が学年末をむかえる。女子大学を共学化して二学部体制で再出発、2004年3月には第1期生が卒業する。最初から3年次編入が認められていたので、3年次に編入学し卒業した人もいるが、いよいよ4年間学んだ新卒業生の誕生である。彼らが社会に受け入れられてよい評価を受け、それがこの学部のみならず大学全体の評判にもつながってほしいと願っている。

社会文化学部という学部の名称は、日本でははじめてであった。そのために、さまざまな混乱を招いたようだ。教職員もこの名称にとまどいを感じられたかもしれない。新学部は2学科に分かれ、さらにそれぞれに2コースを設けたうえ、一級建築士関連課目、教職課程科目を準備しているので、新入生にも選択に迷った人がもいたようである。

社会文化学部という名称を冠するにあたって、私自身は、かなり明確に“社会文化”という言葉の内容をとらえているつもりだった。しかし舌足らずの説明で、皆さんに十分理解していただいているかどうか、「コーマイなご意見で」という皮肉も耳にした。

私は、社会文化論という必修科目を新入生全員を対象として開講し担当した。「社会文化とはなにか」と問われるので、それなら私が講義しよう、ということになったのだ。

3年間、この講義を担当してきて、正直に云って非常に苦渋をなめた。もしかすると私の構想は失敗だったかもしれないと反省している。H教授が、この計画は1年生では無理だと批判されたのも、無理からぬことだと思っている。

私は新入生に過大の期待をしていたのかもしれない。まず、全員を一堂に集めるには教室が狭すぎた。最大の収容力のあるAホールもBホールも定員過剰であった。それに、講

義を聴くという習慣が学生にはない。私語、騒音はどんなに注意してもなくならなかった。教務課の皆さんにも、出席をとることなど、ご厄介をかけた。

私の構想はつぎのようなものである。

①前期のはじめに、私の言う社会文化とはなにか、ということを説明して、そのあと、学生ひとりひとりが、自分自身のアイデアで、テーマをつくる。そのテーマについて、各自で勉強して、自分の「企画書」を書く。それをプライベート、あるいはパーソナル・プロジェクト（PP）と呼び、PPの「企画書」を前期のレポートとして提出してもらう。前期（社会文化論Ⅰ）はそれによって採点する。

②テーマは、阪神間の自然、環境、歴史、文化、社会、社会問題など、なんでもよい。ただ地域的には、阪神間（大阪一神戸間）を原則とする（実際には、この地域的限定は守られず、京都、堺、姫路、近江八幡などのテーマも登場した）。

③後期には、そのPPの進行状況を、教室で他の学生の前で報告してもらう（これがなかなか容易ではなかった。発表の機会をとらえて自分をアピールすることなどには、学生たちがついてこない。少数の学生だけが、それに応じてくれたが、できないという学生が圧倒的であった。「力が出るもの、出せるもの」という激励も、役に立たなかった）。

「馬を水辺に連れて行くことは出来るが、水を飲むことは出来ない」という事実を実感し、しばしば投げ出したくなるようながい挫折感を味わってきた。

④最後に、その完成した研究成果をレポートとして提出する。後期（社会文化論Ⅱ）はそれで採点する。レポートは玉石混淆。すぐれた成果もあったが、ただインターネットで得た情報をそのままプリントしたようなものもあった。

⑤その成果からすぐれたものを選び、大手前大学社会文化学会で発表する（第1回は新学期早々の2001年4月14日に人文科学部の教室を借りて実施し、8人が報告。両学部17人の先生が出席された。第2回は2002年6月8日社会文化学部M102教室で実施。少数のすぐれた学生諸君の応援で、ある程度成功したと思う）。

要するに、私は学生諸君を過信し、過剰な期待をもっていたのである。それにくわえて、私は長い教師生活のなかで、自主的に教師の提案についてくる人達だけを、縁のある学生だと考えてきた。それなりによい学生に出会うことがあったので、「俺についてこい」主義で教壇に立ち講義をしてきた。これは新学部では通用しなかった。つまりハウ・トゥ・ティーチが未熟だった。その点は自己批判し、猛反省をしている。

つまるところ、私は私の意図している“社会文化”という概念と、それを使って、学生自身が考えて調査し、研究し、それをまとめ、発表する機会をつくるという、PPという教育手段を、学生に伝えることが不十分だった、ということなのである。「いまの学生は強制しないとダメです」という人もあった。強制と自発性とはベクトルが違うのだ。

そこで、反省もこめて、以下あらためて、“社会文化”という言葉の説明したい。

## 2. 社会研究と文化研究の意味するもの

文部省への新学部の申請中に、偶然、社会文化学会が組織される動きを知った。その最初の学会（大阪経済大学）に出席して報告し、私の“社会文化”についての考えを報告した。第2回は桃山学院大学で大会があって、それにも出席した。しかし、私たちの意図している社会文化とは異なることが明確になったので、私は退会した。私たちの意図と異なるというのは、この社会文化学会は“社会文化学”を目指していることが、明確になったからで、形容詞としての社会についてその文化、つまり社会の文化を研究するということだったからである。私たちの意図しているものとは微妙に違うのである。

将来、社会文化研究 Socio-cultural Studies という研究分野が確立するかもしれない。しかし、当面私たちは、社会研究 Social Studies と文化研究 Cultural Studies を分けて考えようとしている。カルチュラル・スタディーズという言葉は、現在ではかなり広く用いられていて、米英などでひとつの研究領域を作りだしている。またソーシャル・スタディーズのほうは、一般に社会科学とよばれている社会学、法学、経済学、社会心理学、文化人類学などの分野を指すものとみなしてよい。例えば高島善哉『社会科学入門』などによって、そのおおよそがうかがえるだろう。

社会文化研究の研究対象は、社会現象、文化現象のあらゆる領域を含んでいる。いうまでもなく社会も文化もその自然環境のなかで成立しているから、社会・文化現象の背後にある自然環境も無視することは出来ない。それらの自然、環境、歴史、社会、文化、そして現在生起しつつある環境問題、社会問題、文化問題を、“社会研究”と“文化研究”はあつかうと考えてよい。

## 3. 研究対象はひとつ、アプローチは分かれる

ここで重要なことは、研究対象はひとつであるが、その研究の手法——アプローチは社会研究と文化研究では異なる、という点である。

例をあげよう。人間関係は、まず1人と1人の関係から出発する。わたしとあなた（我と汝）、話し手と聞き手、売り手と買い手、などの相互関係である。これをゲオルグ・ジンメル（1858-1918）は二者関係（ダイアド dyad）と呼び、社会の基礎においた。さらに三者関係（トリアド triad）から、より一層複雑な関係になるのだが、その出発点はダイアドと考えてよいだろう。

コミュニケーション理論は話し手と聞き手を基礎にしてその間に介在する装置（無線電話など）を論じることから出発している。そして少ない話し手（情報の送り手）に対して大衆が聞き手（情報の受け手）になると、マス・コミュニケーションになる。

もっともはっきりしているのは、売り手と買い手である。これが経済交換の起点であることは、経済のABCであろう。交換は、貨幣が仲介するものになる。売り手の品物（商品）が少なく、買い手の需要が大きい場合は、売り手が高く値をつけるし、逆に商品が多い場合には、値が下がる。いわゆる需要と供給の関係で、その経済交換がおこなわれる場を市場と呼び、値段（価格）は供給される商品の量と、それを求める需要（有効需要）の量によって決まる。この関係は需要供給曲線としてしめされ、経済法則が成立する。経済学の初歩はそこからはじまる。

二者関係にジェンダーの要素を加えると、男女関係になる。男と女のダイアドである。しかし、その中身は多様である。恋人同士というのもダイアドだが、それが結婚という社会制度によって夫婦というダイアドになる。そこに子どもが加わると、母—息子、父—娘というダイアドができる。さらに兄弟姉妹関係が加わると、兄—妹、姉—弟というダイアドができる。男同士の兄弟、女同士の姉妹という関係もそれに附随してあらわれる。こうして複雑なジェンダー関係が、いわゆる“家族”にはみとめられる。さらにそれは、親族組織として展開してゆく。すなわち、社会学の家族・親族組織論である。

ここでは、通信、経済交換、家族を例としてあげたが、じつはこうした“理論化”をすすめてゆくのは、私たちのいう“社会研究”の分野のアプローチである。そしてここを起点として、多様なコミュニケーション理論、経済理論、親族理論などが、それぞれの学問分野で展開しているといえる。

しかし、理論は理論としてよいが、それでは現実との間にズレが出てしまわないだろうか。現実の多様な現象は、理論そのままではないことを、私たちは経験的に知っている。

コミュニケーションのダイアドと言っても、早い話、携帯電話はいまほとんどの人が持っているけれども、そこで交わされる情報は、千差万別である。簡単な話から重要な問題まで、じつにさまざまな情報交換がある。抽象的には、送り手と受け手ということになるけれども、その具体的なコンテンツは、それこそ星の数ほど違っているはずである。

売り手と買い手、供給と需要、あるいは市場と言っても、それは抽象概念に過ぎない。具体的な取り引きは、これも千差万別で、じつに多様である。一方でユニクロに代表される廉価販売網が生まれると同時に、高級ブランド商品の豪華な店舗が開店しているのが、現在の“不景気”の日本の状況ではないだろうか。

また、家族と言っても、現在はまったく千差万別である。仮に10世帯の集合住宅があるとして、そこに10の家族が生活しているとす。ある家族はタイガースのファンであり、となりはジャイアンツのファンであっても、不思議ではない。ある家族はクラシック、となりはジャズ、そのとなりは演歌の愛好家でも、あやしむことはない。ある家庭は先祖の墓参を欠かさないが、となりの家庭はそんなことはしないとしても、おかしいことではない。親類つき合いを大切にする家庭と、しない家庭があっても、それぞれの事情として認

めている。これらはすべて、現代の価値観の多様化を反映しているのである。

それぞれの世帯、家族、家庭には、それぞれの歴史がある。またそのメンバーである個人にも、それぞれの個人史（ライフヒストリー）がある。価値観の多様化の結果である。

このように多様に展開している個別の事例を、個別に詳しく記録し、歴史として残してゆくことも、重要な仕事である。こうした個別の現象を、個人、家族、地域社会、など、それぞれについてとりまとめてゆく。それを文化研究のアプローチと呼びたい。

#### 4. 法則定立 nomothetic と個性記述 ideographic の意味

このように研究方法によって学問を区別するという試みは、西南ドイツ学派、あるいは新カント学派とよばれる学者たちによって提起されている。岩波文庫の一冊にヴィルヘルム・ヴィンデルバント（1848-1915）の『歴史と自然科学・道徳の原理について・聖』（1929）がある。主著『プレルディエン』のなかから科学方法論、倫理学、宗教哲学の3論文をまとめた書物である。最初の「歴史と自然科学」は、彼のストラスブルグ大学総長就任講演だといわれ、そのなかで、彼は「もし造語がゆるされるならば」とことわって、法則定立的 nomothetisch と個性記述的 idiographisch のふたつの科学を区別している。法則科学 Gesetzeswissenschaft と事件科学 Ereigniswissenschaft という言葉も登場する（同書19頁）。これは、小論でいう社会研究アプローチと文化研究アプローチにほかならない。

もう一例をあげる。これも岩波文庫の一冊、ヴィンデルバントの後継者であるハインリヒ・リッケルト（1863-1936）の『文化科学と自然科学』（1939）である。この書は、自然科学の台頭に対して文化科学の確立を目指したものであった。新カント派の立場を総括して、伊東俊太郎氏は『文明と自然』（2002）で、つぎのように書いている。

「新カント派にいたるならば、西南ドイツ学派に見られるように、「自然」は「文化」（Kultur）に対立せしめられることになる。すなわちヴィンデルバントやリッケルトにおいては、自然を研究する自然科学は反復可能な現象について普遍的法則を定立する「一般化的方法」をとるのに対し、歴史を範型とする文化科学においては、一回的に生起するものに対して個性記述を行う「個性化的方法」をとるものとして両者を区別し対立させた」（同書182頁）

もっともリッケルトはその第六・七版の序で、誤解を解くための注言として、つぎのように長い弁明をおこなっている（仮名遣いなどは修正）。

「しばしば私はこう書かれているのを見ることがある。すなわち私の見解によると、自然科学はただ法則のみを取り扱うが、歴史科学はそれに反して全く一回的なもの（つまり合法則的なものと出来うるかぎり最大の対立をなすもの）のみを取り扱うのである、と。そんな風のことを私は一度も主張したことはない。この誤解は実は私の著書によってではなく、せいぜいヴィンデルバントの有名な総長就任演説『歴史と自然科学』（1984）によって引き起こされたとするのほかはない。それによると、自然科学的手続きとしての「法則定立的」のそれと歴史的手続きとしての「個性記述的」のそれが対立するのである。この術語のために実際、一方には全く普遍的なものが、他方では全く特殊なものが、科学では問題になるべきもののように思われなくてもないので、私はこの術語を一度も留保を附することなしには使用しなかった。私はむしろ一般化および個性化の方法と言っているのであり、その際それが絶対的な対立ではなくして相対的の区別であることに、いつも極力注意を促してきたのである。この本でも冒頭に、私はすでに1899年、こう書いた。私は本書においてはただ専ら、ほとんどすべての科学的労作がその中間に場所を占めている両方の極端を叙述せんとするものである、と。これに注意しない者には決して私の意図は解らないであろう」（同書9-10頁）

議論は普遍と個別、繰り返し可能と一回きり、そして、科学的認識と歴史認識にまで展開しているのである。

## 5. エティックとエミック（イーミック）の意味

さて、文化人類学には、Etic と Emic という術語ができています。構造言語学者ケネス・L・パイク（1912-）が、言語学の用語である音声的 phonetic と音素的 phonemic から、phon- を除いてエティックとエミック（イーミック）という言葉をつくった。

エティックとは、音声学に由来するのであるが、それはあらゆる言語を対象としてその音声を研究するのに都合のよいシステムを作り出した。万国音標文字（国際音声記号）がそれである。たとえば日本語の母音はアイウエオの5つとされている。しかしじつは、母音にはもっと多くのものがある。例えば朝鮮語（韓国語）では、若い世代では8母音（[i] [e] [ɛ] [a] [ɔ] [o] [u] [w]）を用い、老人はそれにあいまい母音といわれる [w] を含めて9母音が用いられている。フランス語の辞書には、口むろ母音12、鼻母音4が、口蓋の図を添えて掲げられている。また、子音についても朝鮮語の [p] [t] [k] [tʃ] にはそれぞれ3種類の音があり、[s] も2種類あるとされる（渡辺吉鎔・鈴木孝夫『朝鮮語のすすめ』（1981）参照）。さらに、フランス語の場合では、17の子

音が駆使されているのである。そういう音声について、オッシログラフを用いたりして、科学的に研究するのが音声学 phonetics であり、万国音標文字の表は、あらゆる人間の音声をそのなかに含まれるという前提で作成されている。たとえばクセジュの『音声学』（B・マルンベリ、大橋保夫訳）を参照されたい。

他方エミック（イーミック）のほうは phonemics 音素論あるいは phonology 音韻論と呼ばれていて、個々の言語において、その言語で機能的に区別されている音の単位のみを取り出して、その音の単位によってその言語を記述することで、それぞれの言語には示差的特徴 distinctive features があり、その体系を構成する音のみで記述する。つまり、ひとつの言語のみを、もっぱら研究するものである。

文化人類学をすこしでも知っている人ならば、いま自分がしている研究はエティックなものか、それともエミックなものかということは、十分に理解できると思う。たくさんの民族誌を蒐集して、その結果から人類一般の理論を構築するのは、エティックな研究である。

例えば、色はまず2色（黒・白）の認識が普遍的であり、それに第3の色が加わる時は赤であること、第4・5は緑または黄であり、第6は青、第7は茶、そして紫・桃・オレンジ・灰であるという、バーリンとケイの研究はエティックな研究である（Berlin, B. and P. Key: Basic Color Terms, 1969）。それが、たくさんのエミックな民族誌的研究の集積の結果であることはいうまでもない。G・P・マードックの『社会構造』（1949、内藤莞爾訳 1978）、R・M・マーシュの『Comparative Sociology』（1967）などは、そのような研究の成果といえる。

吉田集而はパイクの論文を要約して、つぎのように図示している。

エティックとイーミックの特性（吉田：1984：63頁）

エティック	イーミック
比較的	個別的
単位・分類は事前にある	単位・分類は分析中に決定
体系は分析者が創造	体系は分析者が発見
外側から見る	内側から見る
絶対的	相対的
外部的な論理性	内部的な機能性
非統合的	統合的
部分的	全体的

吉田は、この論文「エティックとイーミック」のなかで、イーミックな研究の例として、イェール大学のハロルド・コンクリンのハヌノー人の色彩分類や人称代名詞の研究などの、民俗分類 Folk taxonomy の成果をあげ、また実例として、九鬼周造の『いきの構造』

(1930) を紹介している。このような研究は、その後発達し展開したエスノサイエンス、あるいは認識人類学として大きく開花した。じつは私も、アフリカのタンザニア、マリ、ザイール（現コンゴ共和国）の調査を通して、それぞれの国のイラク人、バンバラ人、テンボ人という農耕民のイーミックな世界をさぐり、比較して学位論文「アフリカ農耕民の基本的概念群の比較研究」をまとめ、のちに『アフリカ農耕民の世界観』という書物として出版した。“基本的概念群”とは、それぞれの民族集団のイーミックな認識の束を指しているものである。3つのイーミック研究の成果をもとに、アフリカ農耕民というエティックな比較を試みたものである。

## 6. 社会文化現象のレベル：スチュワードの「社会文化統合の諸レベル」

ジュリアン・H・スチュワード（1902-1972）は、私の恩師の一人であるが、20世紀中葉の新進化主義の論客として知られている。彼は文化生態学を提唱し、あわせて文化進化について論じた。『文化変化の理論』（1955、米山俊直・石田絢子訳 1979）はその主著である。そのなかによく引用されている「社会文化的統合の諸レベル」（1951）も、収録されている。この論文は、操作的概念として、levels of socio-cultural integration を提唱したものである。伝統的に人類学が対象としてきた“未開社会”、“部族社会”と呼ばれるものが、現代の国家体制のなかに巻き込まれて、いわゆる文化変容というかたちで変化している。しかしそれは、単純に全部が変化するわけではない、家族、近隣共同体（コミュニティ）、市町村などの地域社会、さらに国家など、それぞれのレベルで変化がうながされているのであって、それぞれのレベルの社会文化的統合をとらえてゆく必要がある、という主張である。彼は人類学者が安易に隣接科学からの概念を借用していることに対し、また他方ではかたくなに“民俗社会 Folk society”や“文化統合 cultural configuration”を強調していることに対して、するどい批判を投げかけたのであった。その具体的な例として、西部ショショニ人のアメリカ白人社会への同化過程、インカ帝国の継承者の変化、スペイン征服後の環カリブ社会の退化現象などを挙げている。

現代日本社会とその文化を見る場合にも、国家体制下の行政、立法、司法の制度、租税制度、教育制度などの存在はいうまでもない前提ではあるが、実際の生活は家族、近隣集団、市町村の行政単位などとともに、それぞれの地方的伝統文化の存在も無視出来ない。こまかく見てゆくと、一人の人を取り巻く“社会環境”には、

家族—知人—近隣集団—選挙の投票所である地域の小中学校—通勤などの行動圏—区役所・市役所・税務署などの行政機関—社寺などの冠婚葬祭に関係する場所—都道府県—関西圏、東京圏などの地域—島（本州・九州・四国・北海道など）—国家—東アジア—アジア太平洋圏—地球



といった一連の“環境”があることになる。

また、“文化環境”との関連で見ると、

家族（言葉やしつけられた行動様式などは、多くここで学習される）—友人関係（その影響もかなり大きい）—方言圏（言語が地域文化の決定的な前提となる）—学校体験（学歴が大きく作用する）—職場—宗教・参加する諸団体（政党・学会・同好会など）

といった環境が深く関わっていることが理解されるだろう。

それぞれが、社会文化のレベルであると言ってよいだろう。私たちの生活は、こうした社会環境、文化環境のなかで営まれているのである。

## 7. ホロン（全体子）という概念：A・ケストラーのホラーキー

ホロン（全体子）という概念は、アーサー・ケストラー（1905-1983）が作ったとされている。『機械の中の幽霊』（1967、日高敏隆・長野敬訳 1969）や『偶然の本質』（1972、村上陽一郎訳 1974）などで知られているこの人は、最後に『ホロン革命（原題は Janus 双面神）』（1978、田中三彦・吉岡佳子訳 1983）という書物を書いている。このホロンという考えは、すでに『機械の中の幽霊』第3章ホロンとしてまとめられている。

ケストラーは、ブダペスト生まれで、はじめ政治に関心を寄せたが、のちに科学ジャーナリストとして著名になり、現在の科学の還元主義に対して、一貫して反対の立場をとって論陣を張ったのだが、ガンの宣告を受けて自殺した。

彼はこのホロンという概念によって有名になった。ホロンとは、holos（全体）+on（部分）。あらゆる事象はそれ自体が全体であって同時に部分であるという意味である。

たとえば人体は、一人の個人として完結した存在であるが、それは生物学的にはさまざまな器官系（呼吸器系、消化器系、循環器系など）に分割可能である。そしてそれぞれの器官系は多様な器官に分かれる（たとえば消化器なら、口腔の舌や歯から、食道、胃、大腸、十二指腸、小腸、肛門までの一連の器官がある）。その器官群はさまざまな組織に分かれ、さらに組織は細胞に分かれ、細胞は細胞の内部の核や細胞質などの小器官に分割され、それは分子、原子、素粒子、最後はクォークと呼ばれている単位にまで分解が可能である。例えば胃は消化器官のひとつであるが、それはひとつの全体であると同時に、消化器の部分でもある。このことは生物体（有機体）ならば人体にかぎらず、一般化できるだろう。

これは生物の個体の話だが、ケストラーはこの“全体であると同時に部分である”という現象を社会にもあてはめている。私たち人間は、たしかに個人として人格をそなえた全体であるが、同時に家族の一員という部分である。家族あるいは世帯はそれ自体が全体で

あるが、その存在している地域社会にとっては、その構成員、つまり部分である。地域社会もまた、近隣集団、市町村といった行政単位、関西とか関東とかいう地域、そして日本という国家、さらに東アジア、アジア太平洋圏（アジア太平洋経済協力会議APECという機構もある）、さらに国際連合UNその他の国際機関というふうに、地球全体にまで広がってゆく。

ケストラーは、すべての事象は、その下位のレベルを統合する点で全体であるが、その上位のレベルの統合に対しては部分である、と言う。そしてこの一連の、最小単位であるクオークから宇宙全体におよぶレベルの連鎖を、ハイラーキー（階層構造）をもじってホラーキー holarchy と呼んでいる。スチュワードの社会文化統合の諸水準（レベル）も、このホラーキーの一部と言えるだろう。

ひところホロンという言葉はよく用いられたので、記憶している人もあるだろう。例えば1989年に兵庫県の主催した21世紀公園都市博覧会にも、“ホロンピア'89”として使われていた。

## 8. 社会文化の単位

まだ共学の新学部を準備中の頃に、私たちは『社会文化の諸相』という本を編集した。福井有副学長と私が編者になって、社会文化学部の教授陣に予定していた先生たちの論文を集め、さらにその末尾に梅棹忠夫、山崎正和、神崎宣武の3先生をゲストに、学内から仲野好重、福井有、福井秀加の3先生、それに私が司会を担当した、「“社会文化”をめぐって」という座談会がついている。そのなかに、私は「社会文化の単位」という一文を寄せた。その一部は文部省へ提出する書類のなかで、この学部の性格を説明するために執筆したものであったが、そのなかで、私は“社会文化の単位 socio-cultural unit”という概念を提出してる。

ソシオ＝カルチュラル・ユニット、略してSCUと呼ぶことにした。SCUは、いわばケストラーのいうホロンのひとつであり、スチュワードのいう社会文化統合の諸レベルのどこかのレベルにあたるものである。

私が社会文化論で課した個人研究PPのテーマ選びは、学生には難題だったようだ。

“猪名川流域を中心とする阪神間の研究、その自然、環境、歴史、社会、文化を研究対象とする”といっても、現象は複雑であり、切り口も多様である。そのなかから一つテーマを選ぶとしても、なにを選べばいいか、学生諸君はとまどったに違いない。実際に提出されたテーマを見ると、予想以上に広範かつ多岐にわたっていた。

もっと親切にSCUを説明すればよかったのかもしれない、と反省している。

## 9. 社会文化論の実例

例として、今年（2002年）のばあいを見ると、さきの2年よりも阪神淡路大震災をとりあげようという人の数が多くなっていった。これは、年代のせいかもしれない。社会文化学部研究室の阪本美恵子助手に整理してもらったところでは、大震災のほか、阪神間の歴史以下、文化、自然、施設、街並、食文化、その他という分類で、歴史では伊丹市・尼崎市の歴史、荒木村重と有岡城、多田神社と多田源氏、越木岩神社など。文化では上島鬼貫、近松門左衛門と尼崎など。自然では猪名川、武庫川の自然など。施設では伊丹空港、甲子園球場など。それぞれ、毎年登場するテーマである。

その他にも、日本万国博覧会、伊丹市・尼崎市の雇用の変化の問題点と解決策、阪急電車の歴史、阪神タイガース、宝塚の歴史、などなど多彩である。大阪城とか姫路城、京都の清水寺をテーマにした人もいた。阪神間というのに、反則ではないかと思ったが、2年目の履修学生のなかに、近江八幡を中心に活躍したウィリアム・ヴォリーズという建築家の研究をして、神戸女学院や関西学院にもこの建築も調査してきた近江出身の学生もいたので、認めることにした。伊丹空港には、旧知の空港会社の社長さんに頼んで、5人ほどの学生と一緒に話を聞きにでかけたりした。

できるだけ足を使って観察し、記録すること、大きいテーマでもそれを絞り込んでゆくこと、インターネットで情報を検索するのは歓迎するが、そのままプリントしただけではダメで必ず自分の考えを書き込むこと、などの助言をしてきたが、全員に指導・助言はできない。どうしても教室で発言する人が中心になってしまう。プレゼンテーションの練習だからと、発言をうながしても、逃げ回っている人達はどうしても後回しになる。教授会でPPの説明をして、カリキュラム・アドバイザーの先生たちの協力を依頼したこともあった。

後期からは、浦畑教授の示唆もあって、“半舷上陸”（こんな言葉を知っている学生は皆無だった）の体制をとり、隔週に人間環境学科と社会情報学科のクラスをもち、出席しない学科の学生は調査研究にあたる、という方式をとった。

はじめの教室のアパシー状態は、半舷上陸の体制によってしだいに改善されてきたといえるが、来年度はもう一人担当の教員を増やしてもらって、せめて各学科単位で講義ができるようにしたいものと考えている。

1年生からこういう注文を課すのはムチャだ、という声もあるが、自分で考え、自分でそれを表現できるように学生を育てて行くのが、社会文化学部の使命であるとすれば、たとえ高望みであるにせよ、自分で学び、自分でまとめ、自分の力でプレゼンテーションができる能力を養成することを、学生たちに要求してもいいのではないかとおもう。

その実際の例を、2度にわたって実現できた大手前大学社会文化学会の学生たちの報告

から見てみると、それぞれ、言語障害をかかえたような状態から出発しながらも、じつに充実した内容を真剣に報告してくれたとおもう。そのことに、私はひとつの達成を感じている。会場に立ち会っていただいた先生たちには、十分に了解していただけるだろう。

この社会文化論で試みた“実験”は、不特定多数の若者のなかから、たまたま縁にしたがって大手前大学社会文化学部の学生になり、得体の知れない先生から自分で考え、自分でしらべ、それを自分で表現するという試練を経てきた学生たちの成果である。それが、すこしでも実現できたことを、私は感謝したいとおもう。

私は思いがけず大手前大学に職を奉ずる身となり、私なりに一所懸命に努力してきた。

2学部になれば、学長は講義しなくてもいいといわれながら、自分たちの作った学部だから、なんとか方向性を見出したいと思って、私なりに努力してきた。

「力が出るもの出せるもの」という言葉は、羽仁もと子の『子供読本』の見出しのひとつとして記憶している。この本はいろはカルタでできていて、「ローマは一日にしてならず」など、いわば格言集だった。子どもの頃読んだのだが、この言葉は記憶している。能力開発というが、実際に能力は開発可能だとおもう。私は学生諸君の本来のポテンシャルを信じたい。どのようにして、その潜在能力を引き出すか、それが教員のエディユース（引き出す）の能力にかかっているのではないだろうか。私は、けっして優れた教師ではない。どなったり、帽子を取れと言ったり、教室は格闘技の場ようではなかったか。講義室にのぞむ時に、私は武者ぶるいをして、クラス全員を引きつけられる話術が欲しいと念願していた。何人の学生が私の話を理解し、それに従ってきているかはわからない。それでも、少数にせよ、よく私の意図を理解し、それぞれ努力している学生がいることがひとつの救いである。

## 10. 「21世紀に生きる君たちへ」

司馬遼太郎に「21世紀に生きる君たちへ」という文章がある。小学校6年の国語教科書のために書かれ、告別式で参列者に配布された。

そのなかには、すばらしいマキシム（格言）が書かれている。

- 人間は、自分で生きているのではなく、大きな存在によって生かされている。
- 自分にはきびしく、相手にはやさしく、という自己を。
- そして、すなおでかしこい自己を。
- 人間は助け合って生きているのである。
- 助け合うという気持ちや行動のもとのもととは、いたわりという感情である。
- 「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」

この三つの言葉は、もともと一つの根からでているのである。

根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練してそれを身につけねばならないのである。

—鎌倉時代の武士たちは

「たのもしさ」

ということ、たいせつにしてきた。人間はいつの時代でも、たのもしい人格を持たねばならない。人間というものは、男女とも、たのもしくない人格にみりよくを感じないのである。

—もう一度くり返そう。さきに私は自己を確立せよと言った。自分にきびしく、相手にはやさしく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、「たのもしい君たち」になっていくのである。

私は司馬の文明論についてちいさい論文を書いた。その最後で、司馬が「踏み出しますか」という文章で、日本文明について論じ、日本人には「華嚴の哲学」が牢固としてあり、その血肉になっていると述べていることを紹介したのだが、この「華嚴の哲学」がもうひとつわからなかった。しかし、最近「華嚴をめぐる話」という文章を読んで、納得できたようにおもう。

一言でいえば、私たちは「自己」というホロンとして生きているのだけれども、それは宇宙全体の一部にすぎない。山川草木、鳥獣虫魚とともにあるのだ、ということである。それはいまあげた「君たちへ」の文章にも流れている。

それは、「まずもろともに宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」という宮沢賢治の詩句のような世界なのである。宇宙の微塵である「自己」を確立すること、それをまさに21世紀に生きる学生諸君に伝えて行くことが、私たちの役割ではないだろうか。

社会文化論の実験は失敗だったか。

社会文化論で3年に渡って試みてきた私たちの“実験”は、2004年からカリキュラム改定を目指している社会文化学部の教科のなかで、諸先生の衆知を集めたよい方向で活用されることを期待したいと考えている。ジェネラルレクチャーという1年次のオムニバス講義とドッキングして、それぞれの先生の“社会文化論”を述べていただくのも、ひとつの選択かともおもう。というのは、それぞれのご専門の分野も、いうまでもなく社会文化のどこかのホロンとして位置付けられるからである。

3年間の試行錯誤は失敗だっただろうか。私は苦い経験をしたが、失敗だったと断定はしたくない。よりよいカリキュラムのなかで、将来もPPという考え方を活かしていただければ、それ以上の喜びはない。

## 「社会文化」という言葉について

### 引用・参考文献

ヴィンデルバント、W. 篠田英雄訳『歴史と自然科学・道徳の原理について・聖』1929 (1894) 岩波書店。

ケストラー、アーサー 日高敏隆・長野敬訳『機械の中の幽霊』1969 (1967)、ペリかん社。

ケストラー、アーサー 田中三彦・吉岡佳子訳『ホロン革命』1983 (1978)、工作舎。

司馬遼太郎「踏み出しますか」『春灯雑記』所収1991、朝日新聞社。

司馬遼太郎「21世紀に生きる君たちへ」大阪書籍『小学国語六年下』

司馬遼太郎「華巖をめぐる話」『司馬遼太郎が考えたこと 14』所収2002、新潮社。

スチュワード、J. H. 米山俊直・石田絢子訳『文化変化の理論』1975 (1955)、弘文堂。

高島善哉『社会科学入門』195X、岩波書店。

吉田集而「エティックとイーミック」合田壽編『認識人類学』所収1982、至文堂。

米山俊直「社会文化の単位について」米山俊直・福井有編『社会文化の諸相』所収2000、大手前女子大学。

米山俊直『アフリカ農耕民の世界観』1990、弘文堂。

リッケルト、H. 佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』1939 (1921)、岩波書店。